

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01757

研究課題名(和文)「立ち直り」概念の理論的検討をふまえた非行少年の社会復帰プロセスに関する研究

研究課題名(英文)Theoretical and empirical study on desistance from crime/delinquency

研究代表者

岡邊 健 (OKABE, Takeshi)

京都大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：40356209

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、犯罪・非行からの立ち直りについて、(1)文献の検討により理論的な課題を析出するとともに、(2)そのプロセスの具体的様態を明らかにすることを目指した。この問題を考えるうえで、規範理論と結びつけて望ましい社会設計を考察することが不可欠であること(日本の犯罪・非行研究にそのような観点を導入すべきであること)、立ち直りプロセスにおいて「失敗」が立ち直りに向けた解釈資源として用いられていること等の知見を得た。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify (1) the details regarding the desistance process from crime/delinquency and (2) some theoretical problems in desistance from crime/delinquency by using previous research. The study reveals that (1) when considering desistance, we need to look at normative theory and what is a desirable society and that (2) "failure" is used as an interpretation resource for rehabilitation in the desistance process.

研究分野：社会学

キーワード：社会学

## 1. 研究開始当初の背景

近年、犯罪・非行からの立ち直りが日本社会で注目を集めている。この主な背景として、次の2点が挙げられる。

第一の背景として、再犯（防止）に対する政策的注目の上昇が指摘できる。近年、『犯罪白書』では再犯防止に関する特集が頻繁に組まれており、「再犯者の実態と対策」について特集された2007年の『犯罪白書』では、犯罪者全体の約3割の再犯者によって、約6割の犯罪がなされていることが報告され、社会に大きなインパクトを与えた。再犯防止にかかる施策は、近年次々と打ち出されている。

第二の背景として、社会的排除に対する社会的注目の上昇も重要である。1990年代以降、グローバルな規模での社会変動が生じ、「ポスト福祉国家」「ポストフォーディズム」といった「ポスト」を冠した社会記述がなされるようになった。日本においても、家族（少子高齢化の進行と性別役割分業を前提とした近代家族の変容）、労働（非正規雇用の増大と日本型雇用慣行の変容）、地域（地域間格差の増大とコミュニティの変容）といった各領域での構造変動を受け、それまでには見られなかったさまざまな社会的リスクが可視化されるとともに、それを受け止めきれなくなった社会福祉システムの問題が「格差社会」や「貧困」の社会問題化といったかたちで表面化するようになった。犯罪・非行もこうした問題と無関係ではいられない。浜井は「刑事施設の福祉施設化」に注目し、矯正施設が社会に居場所のない社会的弱者の「究極のセイフティーネット」となっていると指摘している（浜井浩一 2011『実証的刑事政策論真に有効な犯罪対策へ』岩波書店.）。

## 2. 研究の目的

本研究は、以上のような政策的・社会的背景のなかで、犯罪・非行からの立ち直りを主題とする。具体的には第一に、福祉・教育・刑事司法の各領域における海外（とりわけ英語圏）の政策動向にも留意しつつ、社会学・心理学・犯罪学等関連諸分野の研究の文献の検討から、犯罪・非行からの立ち直りをめぐる諸課題を抽出する。その際、「立ち直り」概念そのものに関する理論的な検討もあわせて行う。

第二に、実際に非行からの社会復帰のプロセスを歩んでいる少年やその周囲のアクターを対象とする質的調査を実施し、彼らが社会復帰において直面する問題の具体的様態を明らかにする。これらの調査にあたっては、海外の先行研究の知見をふまつつも、日本社会の文脈に即した調査設計をすることが肝要であると考えられる。

犯罪・非行からの立ち直りに関する過去四半世紀で最大の業績として、 Sampson と

R. J. and J. H. Laub, 1993, *Crime in the making: pathways and turning points through life*, Harvard University Press.）。彼らは、グリュック夫妻が1940年から計3回にわたって実施した非行少年に対する縦断的調査のデータの再分析を行い、非行少年が成人期以降にみせる立ち直りのプロセスと、そこにおいて重要なライフイベントを明らかにした。量的研究によって、安定した雇用と幸せな結婚を経験する者ほど、成人期において立ち直りを達成していることを明確に示し、質的研究によって、学校中退・再逮捕・軍隊からの不名誉除隊等の構造的不利益が積み重なることで、ライフコース上で安定した仕事や結婚を経験しなかった者が、犯罪・非行から離脱できずにいること等を明らかにしたのである。

一方、元犯罪者へのインタビュー調査等に基づくマルナの研究も、非行少年の社会復帰プロセスについて重要な示唆を与えるものである（Maruna, S., 2001, *Making good: how ex-convicts reform and rebuild their lives*, American Psychological Association. (=津富宏・河野荘子監訳 2013『犯罪からの離脱と「人生のやり直し」——元犯罪者のナラティブから学ぶ』明石書店.)). マルナによれば、犯罪からの離脱にとって決定的に重要なのは、新しいアイデンティティの獲得である。すなわち、犯罪・非行からの離脱者は共通して、「本当の自分」に対する強い信念と「善い人生」の実現に向けた明示的・非明示的なプランを確立しているというのである。

これらの研究は、犯罪・非行からの立ち直りの実相に迫り、政策的・実践的なインパクトも大きかった。しかし、同様の問題関心に基づく日本国内の経験的研究は皆無に近い。本研究は、非行少年の社会復帰のプロセスに、理論研究・質的研究の両方向からアプローチする国内で初めての試みであり、その独創性はきわめて高い。

なお、「立ち直り」概念の理論的検討に際して、本研究はラベリング論の重要な問題提起を引き受けて議論を進める。ラベリング論が明らかにしたのは、社会が特定の社会的弱者を恣意的に選抜し、非行や犯罪に追いやっている現実であった。実際に現代日本社会において、そのような事態が無視できない規模で存在していると指摘されている（浜井前掲書）。このような問題認識のもと、本研究は、単に元犯罪者・元非行少年の立ち直りにとどまらず、社会の側に求められる変革＝社会の「立ち直り」をも射程に入れる。すなわち、元非行少年が復帰する社会（少年を受容する側）もまた、考察の対象とするということである。この点も、本研究の大きな特色である。

## 3. 研究の方法

[理論的検討]

犯罪・非行からの立ち直りに関する社会

学・犯罪学等の先行研究を検討し、論点整理と理論的課題の抽出をおこなう。同時に、犯罪・非行の原因や背景を犯罪者・非行少年のみに求める「個人化」の傾向を否定し、犯罪・非行問題を社会のありよう（やその変革）と関連づけて考察する理論的・実証的な社会学・犯罪学等の研究を収集・検討し、「立ち直り」概念の理論的検討を深める。

関連する研究群は、ラベリング論、葛藤犯罪学、新犯罪学、フェミニスト犯罪学、受刑者犯罪学等である。日本の社会学・犯罪学研究においては、新犯罪学以降の「批判的犯罪学」と総称される研究群がほとんど知られておらず、翻訳された文献も皆無に等しい。これらの文献を収集し、その知見を整理することで、「立ち直り」概念を複眼的に捉え直す視座を得る。

#### [質的調査]

日本の福祉・教育・刑事司法システムの文脈に即した形で、非行少年の社会復帰プロセスの具体的な態様を明らかにするための質的調査を実施する。具体的には、非行少年の立ち直りを目的に掲げる西日本の施設 X に協力を依頼し、入所者やスタッフ等への縦断的インタビュー（半構造化面接）等を行う。

#### 4. 研究成果

##### [理論的検討]

次に挙げる文献を精読・検討し、論点の整理や理論的な課題の抽出をおこなった。

Carrier, N. and J. Piche, 2015, "The state of abolitionism," *Champ pénal/ Penal field [Online]*, 12, Online since 21/8/2015, connection on 11/11/2017. DOI: 10.4000/champenal.9164

Carrier, N. and J. Piche, 2015, "Blind spots of abolitionist thought in academia," *Champ pénal/ Penal field [Online]*, 12, Online since 10/8/2015, connection on 11/11/2017. DOI: 10.4000/champenal.9162

Cottee, S. 2013 "Judging offenders: the moral implications of criminological theories" in M. Cowburn, M. Duggan, A. Robinson and P. Senior eds., *Values in criminology and community justice*, Policy Press, 5-20.

Pemberton, S. 2015 "Defining social harm" in S. Pemberton, *Harmful societies: understanding social harm*, Policy Press, 13-34.

田上大輔・佐々木啓 2015「規範理論と秩序問題——社会学における規範的問いと経験的問いに関する一考察」『東洋大学人間科学

総合研究所紀要』17: 75-90.

Austen, L. and M. Cowburn 2013 "Post-modernism and criminological thought: 'Whose science? Whose knowledge?'" in M. Cowburn, M. Duggan, A. Robinson and P. Senior eds., *Values in criminology and community justice*, Policy Press, 21-37.

盛山和夫 2006「理論社会学としての公共社会学にむけて」『社会学評論』57(1): 92-108.

Hillyard, P. and S. Tombs, 2004, "Beyond criminology?," in P. Hillyard, C. Pantazis, S. Tombs, and D. Gordon eds., *Beyond criminology: taking harm seriously*, Pluto Press, 10-29.

Greer, S and J. Hagan, 2001, "Crime as disrepute," in S. Henry and M. M. Lanier eds., *What is crime?: controversies over the nature of crime and what to do about it*, Rowman & Littlefield, 207-226.

Henry, S. and M. M. Lanier, 2001, "The prism of crime: toward an integrated definition of crime," S. Henry and M. M. Lanier eds., *What is crime?: controversies over the nature of crime and what to do about it*, Rowman & Littlefield, 227-243.

Arrigo, B. A., 1998, "In search of social justice: toward an integrative critical (criminological) theory," in B. A. Arrigo ed., *Social justice/criminal justice: the maturation of critical theory in law, crime, and deviance*, Wadsworth, 253-272.

犯罪・非行からの立ち直りを考えるうえで、規範理論と結びつけて望ましい社会設計を考察することが不可欠であること（日本の犯罪・非行研究にそのような観点を導入すべきであること）等が確認された。

関連する主な発表:

雑誌論文: 後掲の⑩・⑪・⑫

学会発表: 後掲の③・⑥・⑪

図書: 後掲の②・④

##### [質的調査]

施設 X において、計 9 回にわたり入所者・スタッフのべ 23 人へのインタビューを実施した。また、施設 X における特定場面の観察を計 15 回(1 回あたり数十分)実施した。

これらの調査により、「失敗」が「立ち直り」に向けた解釈資源として用いられていること（「再犯」も「立ち直り」に向けた資源となる可能性があること）、少年が「贖罪の脚本」(Maruna 前掲書)をもとにした自己物語

の展開を多用する背景に施設 X での「立ち直り」に向けた加熱があること、その加熱は過度な自己責任を求めるという意味で少年にとって「害 harm」となりうるが、施設 X ではその「害 harm」を抑制する「立ち直り」に向けた冷却もまたおこなわれていることが明らかとなった。

関連する主な発表：

雑誌論文：後掲の⑧

学会発表：後掲の①・③・④・⑤

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 22 件)

- ①岡邊健, 2018, 「少年院出院者の自己申告非行とその規定要因」『法務総合研究所研究部報告』58: 172-185 (査読無) .
- ②OKABE, Takeshi, 2018, "The Quantitative Analysis of Juvenile Delinquency in Contemporary Japan (Part 4)," *Journal of Cross-Cultural Studies*, 12: 60-67 (査読無) .
- ③OKABE, Takeshi, 2017, "The Quantitative Analysis of Juvenile Delinquency in Contemporary Japan (Part 3)," *Journal of Cross-Cultural Studies*, 11: 37-53 (査読無) .
- ④OKABE, Takeshi, 2017, "The Quantitative Analysis of Juvenile Delinquency in Contemporary Japan (Part 2)," *Journal of the Literary Society of Yamaguchi University*, 67: 87-131 (査読無) .
- ⑤只野智弘・岡邊健・竹下賀子・猪爪祐介, 2017, 「非行からの立ち直り(デシスタンス)に関する要因の考察——少年院出院者に対する質問紙調査に基づいて」『犯罪社会学研究』42: 74-90 (査読有) .
- ⑥相良翔, 2017, 「更生保護施設在所者の『更生』——『更生』における自己責任の内面化」『ソシオロジ』62(1): 115-131 (査読有) .
- ⑦相良翔, 2017, 「ダルクヴェテランスタッフの『回復』——ヴェテランスタッフへのインタビューからの考察」『駒澤社会学研究』49: 137-158 (査読無) .
- ⑧都島梨紗, 2017, 「更生保護施設におけるスティグマと『立ち直り』——ある非行経験者のスティグマ対処行動に関する語りに着目して」『犯罪社会学研究』42: 155-170 (査読有) .
- ⑨OKABE, Takeshi, 2016, "The Quantitative Analysis of Juvenile Delinquency in Contemporary Japan (Part 1)," *Journal of the Literary Society of Yamaguchi University*, 66: 121-160 (査読無) .
- ⑩山口毅, 2016, 「シティズンシップと教育言説」『帝京社会学』29: 55-71 (査読無) .
- ⑪平井秀幸, 2016, 「ポスト・リスクモデルの犯罪者処遇へ?——新自由主義・レジリ

エンス・責任化」『犯罪社会学研究』41: 26-46 (査読無) .

- ⑫平井秀幸, 2016, 「犯罪・非行からの『立ち直り』を再考する——『立ち直り』の社会モデルをめざして」『罪と罰』53(3): 121-140 (査読無) .
- ⑬藤間公太, 2016, 「施設養護家庭論の検討——児童自立支援施設での質的調査から」『社会学評論』67(2): 148-165 (査読有) .
- ⑭相良翔・伊藤秀樹, 2016, 「薬物依存からの『回復』と『仲間』——ダルクにおける生活を通じた『欲求』の解消」『年報社会学論集』29: 92-103 (査読有) .
- ⑮都島梨紗, 2015, 「少年院教育の処遇経験とインフォーマルな社会集団——非行少年の仲間集団の在り方に着目して」『現代の社会病理』30: 87-105 (査読有) .

[学会発表] (計 23 件)

- ①岡邊健, 2017, テーマセッション「非行少年の『立ち直り』を考える——パネルインタビューにもとづく批判的検討」(コーディネーター・司会), 日本犯罪社会学会第 44 回大会.
- ②岡邊健, 2017, シンポジウム「学校は逸脱・非行にどうかかわるか」(コーディネーター・司会), 日本犯罪社会学会第 44 回大会.
- ③相良翔, 2017, 非行からの「立ち直り」に向けた介入における潜在的な「害 harm」の検討, 日本犯罪社会学会第 44 回大会.
- ④都島梨紗, 2017, 更生保護施設における「立ち直り」資源生成過程の検討——スタッフの指導ストラテジーに着目して, 日本犯罪社会学会第 44 回大会.
- ⑤高橋康史, 2017, 家族が「立ち直る」ことは可能か——非行臨床における家族支援論の限界, 日本犯罪社会学会第 44 回大会.
- ⑥Hirai, Hideyuki, 2016, In the Name of Protecting Prisoners' Rights: Understanding Prisoners' Experience of Responsibility and Bulimic Empowerment in Contemporary Japan, Workshop on Critical Prison Studies, Carceral Ethnography, and Human Rights: From Lived Experience to Global Action.
- ⑦藤間公太, 2016, 社会的養護にみる歪んだ家族主義, 2016 年度三田社会学会大会.
- ⑧相良翔, 2016, 薬物依存からの「回復」における「棚卸し」と「埋め合わせ」——ダルクメンバー/スタッフの「回復」における困難とその克服(1), 第 89 回日本社会学会大会.
- ⑨都島梨紗, 2016, 協力雇用主における就労支援の作法——「就労=立ち直り」言説の受容に注目して, 犯罪社会学会第 43 回大会.
- ⑩都島梨紗, 2016, どのように「元」非行少年になっていくのか——非行経験者への追跡調査を事例として, 日本教育社会学会第

68 回大会.

- ⑪山口毅, 2015, シティズンシップと教育言説, 日本教育社会学会第 67 回大会.
- ⑫相良翔, 2015, ダルクスタッフの「回復」の多様性——ベテランスタッフへのインタビューを焦点に, 第 88 回日本社会学会大会.
- ⑬相良翔, 2015, 更生保護施設職員の「処遇」に関する社会学的考察, 福祉社会学会第 13 回大会.
- ⑭都島梨紗, 2015, 少年院出院者における就労の継続——職業アスピレーションに着目して, 犯罪社会学会第 42 回大会.
- ⑮高橋康史, 2015, 刑余者の地域生活の維持に関する社会福祉学的考察——グループホーム入居者の事例から, 日本司法福祉学会第 16 回大会.

[図書] (計 12 件)

- ①龍谷大学矯正・保護総合センター編 (岡邊健他訳), 2018 『キャンベル共同計画介入・政策評価系統的レビュー第 12 号』龍谷大学矯正・保護総合センター, 92 ページ(12~59 ページ).
- ②岡本英生・松原英世・岡邊健, 2017 『犯罪学リテラシー』法律文化社, 212 ページ.
- ③浜井浩一編 (岡邊健他著), 2017 『犯罪をどう防ぐか (シリーズ刑事司法を考える第 6 巻)』岩波書店, 342 ページ(22~40 ページ).
- ④伊藤良高・富江英俊編 (山口毅他著), 2017 『教育の理念と思想のフロンティア』岩波書店, 109 ページ(31~37 ページ).
- ⑤藤間公太, 2017 『代替養育の社会学——施設養護から〈脱家族化〉を問う』晃洋書房, 192 ページ.
- ⑥高原正興・矢島正見編 (岡邊健他著), 2016 『関係性の社会病理』学文社, 224 ページ(50~68 ページ).
- ⑦前田拓也他編 (平井秀幸他著), 2016 『最強の社会調査入門——これから質的調査をはじめよう人のために』ナカニシヤ出版, 223 ページ(144~158 ページ).
- ⑧本田由紀編 (相良翔他著), 2015 『現代社会論——社会学で探る私たちの生き方』有斐閣, 209 ページ(155~177 ページ).

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岡邊健 (OKABE, Takeshi)  
京都大学・大学院教育学研究科・准教授  
研究者番号: 40356209

### (2) 研究分担者

山口毅 (YAMAGUCHI, Takashi)  
帝京大学・文学部・准教授  
研究者番号: 80459388

平井秀幸 (HIRAI, Hideyuki)  
四天王寺大学・人文社会学部・准教授  
研究者番号: 00611360

藤間公太 (TOMA, Kota)  
国立社会保障・人口問題研究所・社会保障  
応用分析研究部・研究員  
研究者番号: 60755916

相良翔 (SAGARA, Sho)  
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教  
研究者番号: 40736469

### (3) 連携研究者

都島梨紗 (TSUSHIMA, Risa)  
東亜大学・人間科学部・講師  
研究者番号: 70779909

白松賢 (SHIRAMATSU, Satoshi)  
愛媛大学・大学院教育学研究科・教授  
研究者番号: 10299331

久保田真功 (KUBOTA, Makoto)  
関西学院大学・教職教育研究センター・准  
教授  
研究者番号: 00401795

### (4) 研究協力者

岡村逸郎 (OKAMURA, Itsuro)  
筑波大学大学院生

高橋康史 (TAKAHASHI, Koshi)  
筑波大学大学院生

志田未来 (SHIDA, Mirai)  
大阪大学大学院生